

## 縦横

---

天野建知事が三期十二年を限りにその座を去った。天野氏が就任したのが1991年2月、偶々ではあったがこの年の12月にはソ連邦が崩壊するという世界史的な激動が起きた。そしてその後の国内外の変化は筆舌に尽くしがたい。実に、天野知事は第二次世界大戦後最大の激動の十二年をその地位に止まっていたことになる。

それ以前、県内には特定の政治家に連なる権力構造が瀰漫していて、それに県政がろう絡されているという批判が渦巻いていた。その詳細を筆者は寡聞にして知らないが、中選挙区制度ゆえの保守政党内部の派閥争いや公共事業受注における「勝ち組・負け組」の熾烈な葛藤などは誰の目にも明らかだったから、まんざら火の気の無いところの煙ではなかったのであろう。天野氏就任とともにそのようなおぞましい権謀術数は影を潜めたから、県政界の悪しき「55年体制」を一掃した天野氏の功績はいくら賞賛してもし過ぎることはない。

しかし、「時代に棹差す」構想力と行動力が決定的に不足していたために、不作為ゆえの「失われた12年」という評価もまた下さなくてはならない。十二年前の知事選で、筆者は候補者のTV討論番組の司会などもしたのでよく覚えているが、上述の権力構造批判について、天野氏はオンブズマン制度の導入や各種委員会委員の入れ替えなどを公約していたが、後者について総合計画委員任命などで若干の新機軸を出した以外にははかばかしい成果は無い。「環境首都」なる造語は、志の高さに比べて成果は乏しく、定義の定まらなかった「幸住県」と共についに「死語」となった。

このように、公約の実行というようなレベルもさりながら、その後の激動をわが地域の問題に引き付けてみる想像力さえあれば、多様な政策が提案されてしかるべきであった。産業政策・情報化政策・資源循環政策・情報公開・教育改革等々、国が手詰まりゆえにこそ地域から起す「新しい波」を創造するに山梨県は最適規模の自治体だったのではないか。

新知事には、豊かな想像力・斬新な構想力・果敢な行動力・高い思考力・的確な説明力を望む。併せて県民が自慢したくなるようなカッコウよさも。